

令和 6 年 4 月 17 日現在

機関番号：34316
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：20H04431
研究課題名（和文）シエラレオネにおける当事者・家族主体のメンタルヘルスケア導入アクションリサーチ

研究課題名（英文）Action Research on Mental Health Care in Sierra Leone

研究代表者
落合 雄彦（Ochiai, Takehiko）
龍谷大学・法学部・教授

研究者番号：30296305
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、シエラレオネで萌芽しつつある精神障害当事者・家族のセルフヘルプや組織化の動きに注目して現地調査を実施した。具体的には、同国の首都フリータウンで2014年に発足した精神障害当事者・家族の団体であるService Users and Family Members Association (SUFMA)を訪れて聞き取り調査を実施するとともに、日本でのメンタルヘルス関連の実践を伝えるためのワークショップを開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は、第一に、シエラレオネで萌芽したばかりの精神障害当事者・家族のセルフヘルプや組織化の動きに焦点をあて、その動態を明らかにしたことにある。第二に、本研究課題では、日本におけるメンタルヘルス関連の諸実践の事例や教訓をシエラレオネ側の精神障害当事者・家族へと伝えることで、同国の精神障害当事者・家族のセルフヘルプ運動を側面から支援することができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we conducted a field research focusing on the budding movement of self-help and empowerment for people with mental disabilities and their families in Sierra Leone. Specifically, we visited the Service Users and Family Members Association (SUFMA), an organization for people with mental disabilities and their families that was established in 2014 in Freetown, the capital of Sierra Leone, to conduct interviews, and held a workshop to inform Sierra Leonean people about mental health-related practices in Japan.

研究分野：アフリカ研究

キーワード：アフリカ シエラレオネ メンタルヘルス 当事者 エンパワメント 家族

1. 研究開始当初の背景

西アフリカの国シエラレオネでは、1990年代に激しい内戦が展開された。そして、その過程のなかで、少年たちがゲリラに誘拐されて児童兵にさせられたり、少女たちがゲリラ兵の「妻」として事実上の性的虐待を受けたりするなどの深刻な人権侵害状況が広範にみられた。また、ゲリラ兵が一般市民に対して四肢切断などの残虐な暴力行為を繰り返したり、マリファナ、ヘロイン、コカインなどの薬物が戦闘員や若者の間で広く乱用されたりした。こうした内戦下での暴力や薬物使用は、児童をはじめとする様々な社会階層の人々に対して、身体的な傷や障害に加えて、トラウマ、心的外傷後ストレス障害(PTSD)、神経症といった多くの心の問題を残した。さらに、2014年に突如発生したエボラ出血熱の感染拡大や2017年8月にフリータウンで生じた大規模な地滑りもまた、数千人単位の犠牲者を出すとともに、メンタルヘルスをめぐる課題をシエラレオネ社会に突き付ける結果となった。このほか、同国では、そうした戦争や災害などに起因する心のケアの問題だけではなく、通常ある一定の割合で生じる統合失調症などへの精神保健サービスの必要性も看過できない。

ところが、紛争後のシエラレオネでは、紛争前よりもメンタルヘルスケアに対するニーズが高まりをみせているにもかかわらず、紛争前に存在していたわずかばかりの精神保健関連施設は内戦によって大きな被害を受け、研究開始当初の約700~800万人の国民に対して、フォーマルな医療保健資源は驚くほどわずかではなかった。具体的にいえば、シエラレオネには当時、精神科病院は首都フリータウンに100床ほどの病院が1カ所あるのみであり、精神科医は全国で2名、精神科看護師は20名程度しかいなかった。

そうしたシエラレオネのように精神保健福祉施設がほとんど存在せず、フォーマルな精神保健サービスの提供が極めて限定的な社会では、家族や隣人、そして何よりも精神障害当事者自身をエンパワメントすることが重要なアプローチになる。シエラレオネでも2014年、精神障害当事者・家族会が発足し、当事者と家族によるミーティングがフリータウンで月1回開催されるようになるなど、研究開始当初、メンタルヘルスの当事者・家族によるセルフヘルプと組織化の動きが萌芽しつつあった。しかし、そうしたメンタルヘルスの当事者・家族会の活動は、まだその端緒を開いたばかりであり、リーダーシップの上でも、事務能力の上でも、財政基盤の上でも極めて脆弱であって、何よりもその活動の目的や方向性が必ずしも明確に定まっていなかった。シエラレオネにおいて真の意味での持続可能なコミュニティベースのメンタルヘルスケアを展開するためには、そうした当事者や家族の「力」が不可欠だが、研究開始当初はまだ、当事者・家族会は萌芽したばかりであり、その前途は依然として不透明であった。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、精神障害当事者・家族のセルフヘルプやエンパワメントに関するこれまでの日本の豊かな知見や実践を適宜援用することで、シエラレオネで萌芽したばかりの精神障害当事者・家族によるセルフヘルプと組織化の動きを支援し、いわばその「開花」を側面から手助けすることにあつた。具体的には、フリータウンで2014年に発足した精神障害当事者・家族会であるService Users and Family Members Association (SUFMA)との全面的な協力関係のもとで、「実践(アクション)」と「研究(リサーチ)」を融合したアクションリサーチを展開し、シエラレオネの当事者・家族会の課題を明確化するとともに、そのエンパワメントを図ることを目指した。

3. 研究の方法

研究開始当初は国内での文献研究とシエラレオネでの現地調査/活動を実施する予定であった。ところが、予想だにしていなかったコロナ禍の発生ために、後者の現地調査/活動の実施が大幅に遅延してしまった。現地調査/活動に着手できたのは、4年間の研究期間のうちの実に3年目のことであり、このことが現地調査/活動のあり方に大きな影響を及ぼした。

具体的には、当初1年目(2020年度)については、<知る>をテーマに、「当事者」と「家族」に焦点をあてつつシエラレオネでの現地調査/活動を実施する予定であった。調査地はフリータウンであり、「当事者」に関しては、当事者・家族会に参加する当事者の基本属性(年齢、性別、民族)、診断名、家族構成、成育歴、病歴、生活、ニーズ、ストレングス、将来の希望、当事者・家族会への期待など、について聞き取り調査を行う予定であった。他方、「家族」に関しては、当事者に対して日常生活レベルの支援を行っている家族が直面する困難やニーズ、当事者・家族会への期待などについて情報を収集するつもりでいた。なお、こうした現地調査にあたっては、精神障害当事者・家族会の代表であるポール・カイカイ(Paul Kaikai)氏などの助言と協力を仰ぐこととしていた。また、2~3年目(2021~2022年度)には、「当事者・家族会」の組織に焦点を当て、具体的には、精神障害当事者・家族会の組織運営に関する情報収集を行うとともに、定例ミーティングに参加して参与観察を行うほか、過去の活動記録や会運営のサポートをしているNGOスタッフなどへの聞き取り調査も実施する予定であった。そして、特に3年目(2022年度)からは、単に<知る>ための情報収集だけではなく、<

伝える>ための活動も開始し、具体的には、日本の「当事者研究」といったメンタルヘルス関連実践をシエラレオネ側の当事者・家族に紹介することを目指した。そして、4年目(2023年度)には、<変わる>をテーマとしつつ、まず当事者・家族自身が主宰するセミナーを開催するとともに、精神障害当事者・家族が自ら企画・出演するラジオ番組を制作し、フリタータウンの民間FM局から放送することを目指した。

しかし、コロナ禍のためにそうした現地でのアクションリサーチの実施が大幅に遅れてしまった結果、結局のところ、<知る><伝える><変わる>という研究活動の3本柱のうち、<知る><伝える>という2つの活動までしか展開できず、シエラレオネ側の精神障害当事者・家族会が<変わる>という段階まではアクションリサーチをなかなか進展させることができなかった。

4. 研究成果

本研究課題を通して、シエラレオネで萌芽したばかりの精神障害当事者・家族のセルフヘルプや組織化の動きについて詳細に情報収集するとともに、日本におけるメンタルヘルス関連の実践例などをシエラレオネ側に伝えることができた。そうした研究成果は、たとえば、金田知子「精神障害を生きる(I):あるシエラレオネ人女性のライフヒストリー」(『女性学評論』37:79-94,2023)やOchiai, Takehiko “Colonial Psychiatry in British West Africa: Dr Robert Cunyngham Brown’s 1936 Visit to Advise and Report on the Care and Treatment of ‘Lunatics’” (*Asian Journal of African Studies*, 54: 25-52, 2023)といった論文の形で発表した。また、落合雄彦「1950年代のナイジェリアにおける精神科施設」(日本アフリカ学会第58回学術大会、2021年)や落合雄彦「ガンビアからシエラレオネへ:1930年代の英領西アフリカにおける精神病者の移送」(第26回日本精神医学史学会大会、2023年)のような、シエラレオネを含む西アフリカ諸国のメンタルヘルスケア史に関する学会口頭発表をあわせて実施した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Ochiai, Takehiko	4. 巻 56
2. 論文標題 The Removal of 'Lunatics' from The Gambia to Sierra Leone in the 1930s	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Ryukoku Law Reiview	6. 最初と最後の頁 173～189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金田知子	4. 巻 37
2. 論文標題 精神障害を生きる（ ）：あるシエラレオネ人女性のライフストーリー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 女性学評論	6. 最初と最後の頁 79～94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田知子	4. 巻 18
2. 論文標題 暴力とハラスメントを伴う「かわり困難事例」の理解と対応：クライアントとソーシャルワーカーの援助関係に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク実践研究	6. 最初と最後の頁 28～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ochiai, Takehiko	4. 巻 54
2. 論文標題 Colonial Psychiatry in British West Africa: Dr Robert Cunyngham Brown's 1936 Visit to Advise and Report on the Care and Treatment of 'Lunatics'	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asian Journal of African Studies	6. 最初と最後の頁 25～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 落合 雄彦	4. 巻 55
2. 論文標題 英領西アフリカの植民地精神医療：ロバート・カニンガム・ブラウンによる、精神病患者のケアと処遇に関する1936年調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 龍谷法学	6. 最初と最後の頁 1～27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50873/10462	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 落合雄彦	4. 巻 34
2. 論文標題 1930年代におけるガンビアからシエラレオネへの精神病患者の移送	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 スワヒリ&アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 39～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金田知子	4. 巻 37
2. 論文標題 精神障害を生きる（ ）：あるシエラレオネ人女性のライフヒストリー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 女性学評論	6. 最初と最後の頁 79～94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 落合 雄彦	4. 巻 32
2. 論文標題 英領ケープ植民地におけるアサイラムの史的展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 スワヒリ&アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 42～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/81406	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ochiai Takehiko	4. 巻 55
2. 論文標題 Lunatic Asylums in the British Cape Colony, 1846-1910	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 龍谷法学	6. 最初と最後の頁 337 ~ 356
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.50873/10472	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 落合雄彦
2. 発表標題 植民地期のガンビアからシエラレオネへの精神病者の移送：1930年代を中心にして
3. 学会等名 日本アフリカ学会第60回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 落合雄彦
2. 発表標題 ガンビアからシエラレオネへ：1930年代の英領西アフリカにおける精神病者の移送
3. 学会等名 第26回日本精神医学史学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 落合雄彦
2. 発表標題 植民地時代のナイジェリアにおけるハンセン病コントロール
3. 学会等名 日本アフリカ学会第59回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 落合雄彦
2. 発表標題 1950年代のナイジェリアにおける精神科施設
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 落合雄彦
2. 発表標題 英領ケープ植民地（南アフリカ）の5つの公立精神病アサイラム：1846-1910年
3. 学会等名 第24回日本精神医学史学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 落合 雄彦、松田 素二、浜田 明範、平野（野元） 美佐、佐藤 千鶴子、松本 尚之、中村 香子、 佐久間 寛、阪本 拓人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 アフリカ潜在力のカレイドスコープ	

1. 著者名 Ochiai, Takehiko, Misa Hirano-Nomoto and Daniel E. Agbibo eds.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Langaa RPCIG	5. 総ページ数 277
3. 書名 People, Predicaments and Potentials in Africa	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	金田 知子 (Kanata Tomoko) (10351850)	神戸女学院大学・文学部・教授 (34510)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関